



シンデレラで
ひとこと



はてなハイク
パロディ

さく やんまに
え くたびれはてこ



目次

ふたり	1
ままはは	3
おなまえ	4
天下一武道会	5
おようふく	6
オフ会	7
くま	9
かぼちゃの馬車	10
ねずみ	12
しんかんせーん	13
やくそく	14
イマココ	15
おかえり	16
サテン	17
ペプシ	18
かいだん	19
もんぼん	20
おとした	21
おふれ	22
ずでーん	23
けらけら	24
ぺろぺろ	25
生地	26
けっこんしき	27
めでたしめでたし	28

ふたり

外国っぽいけどはてなハイクがあるところに、お父さんと二人ですんでいる娘がいました。

かわいそうに、この子のお母さんは病気で亡くなってしまったのです。

「お母さん、どうして死んでしまったの!？」

娘は毎日、お墓の前で泣いたり、お墓の写真をハイクでうpしたりする毎日を過ごしていました。



ままはは

そんな少女をみかねて、お父さんは新しいお母さんをつれてきました。

二人の新しい JK と JC も一緒です。

「私が 新しいお母さんだよ おまえのお母さんだよ 笑

きちんと 挨拶を おし！ 笑」

あたらしいおかあさんはめちゃくちゃウザそうに言いました。

「今日から お前は 屋根裏部屋で 寝るのよ！ おほほ」

二人のお姉さんもめっちゃ dis ってくる件。



おなまえ

少女は一日中仕事をするようになりました。

料理や皿洗い、洗濯や掃除、プログラミングや人力回答、グリーンスター稼ぎなど、休む暇ありません。

そして、仕事が終わると、いつも暖炉の側の灰の上に腰掛けて、ケータイ片手に愚痴ポストをするようになりました。

灰の上は、ぬこ画像のようにあたたかかかかったからです。

「これから おまえを、シンデレラと呼ぶことにするわ。灰だらけという意味よ。」

いじわるな JK は原作どおりにこんなことを言いました。

「ハイカーには灰がびったりね！ ほほほ」

いじわるな JC はツイッター片手にうまいこと言ったつもりでした。ふぁぼられ厨め。



天下一武道会

そんなシンデレラがハイクをみていると、
ある時、「お城のぶとうかい」というキーワードがあがっているのを見つけました。
ハイクには天下一武道会の画像が大量に貼られてますが、
関連キーワードをみると「王子さまがお妃を探すオフ」というのが目に入りました。

王子さまがお妃を探すオフ



おようふく

シンデレラのお姉さんたちも参加するようです。

「まあ、嬉しい！ アタシ、どんな お洋服を 着て行こうかしら みたいな。」

「王子さまに どんなボケをして カラースターを頂こうかしら。」

でもはてなパーカーやはてなTシャツはどうかと思うシンデレラでした。



オフ会

舞踏会の日が来ました。

シンデレラは、一生懸命お姉さんたちの支度を手伝いました。

お姉さんたちが少しでもマシ・・・綺麗に見えるように、上手に髪を結って、お化粧をしてあげました。

「シンデレラ、おまえもオフ会に行きたいでしょう。」

「まあ、お姉さま、私のような金欠無名ハイカーが行けるわけはありませんもの。」

「そうね、シンデレラがオフなんかに行ったら、ほのめかしでdisられるわね。」

でも、お姉さんたちが馬車に乗って馬車道・・・じゃなくお城に出かけてしまうと、シンデレラは、わっと泣き出してしまいました。

シンデレラもオフ会に行きたかったのです。素直になれなくて# sunanare



くま

「泣くのはおやめ。」

いつのまにか、あやしいクマさんが立っていました。

「きゃー！クマよ！襲われる！変態ポストをされるわ！」

落ち着くまで小一時間かかりました。

「おしろに行かせてあげるからちょっと黙ったほうがいいと思うな。うん。

さあ、そのパソコンで、かぼちゃの絵をひとつ探しておいで。」

シンデレラはわけがわかりませんでした、

そもそもなんでクマが人語を喋るのかもナゾなので深く考えないようにしました。

シンデレラは去年ははてなスターがカボチャだったから楽だったのになあと愚痴りながら、

言われたとおりに壁紙サイズのかぼちゃの絵をみつけてきました。



かぼちゃの馬車

「変態クマさん、略して変熊、これで何をするの？」

「・・・。」

「かわいいクマさん。これで何をするの？」

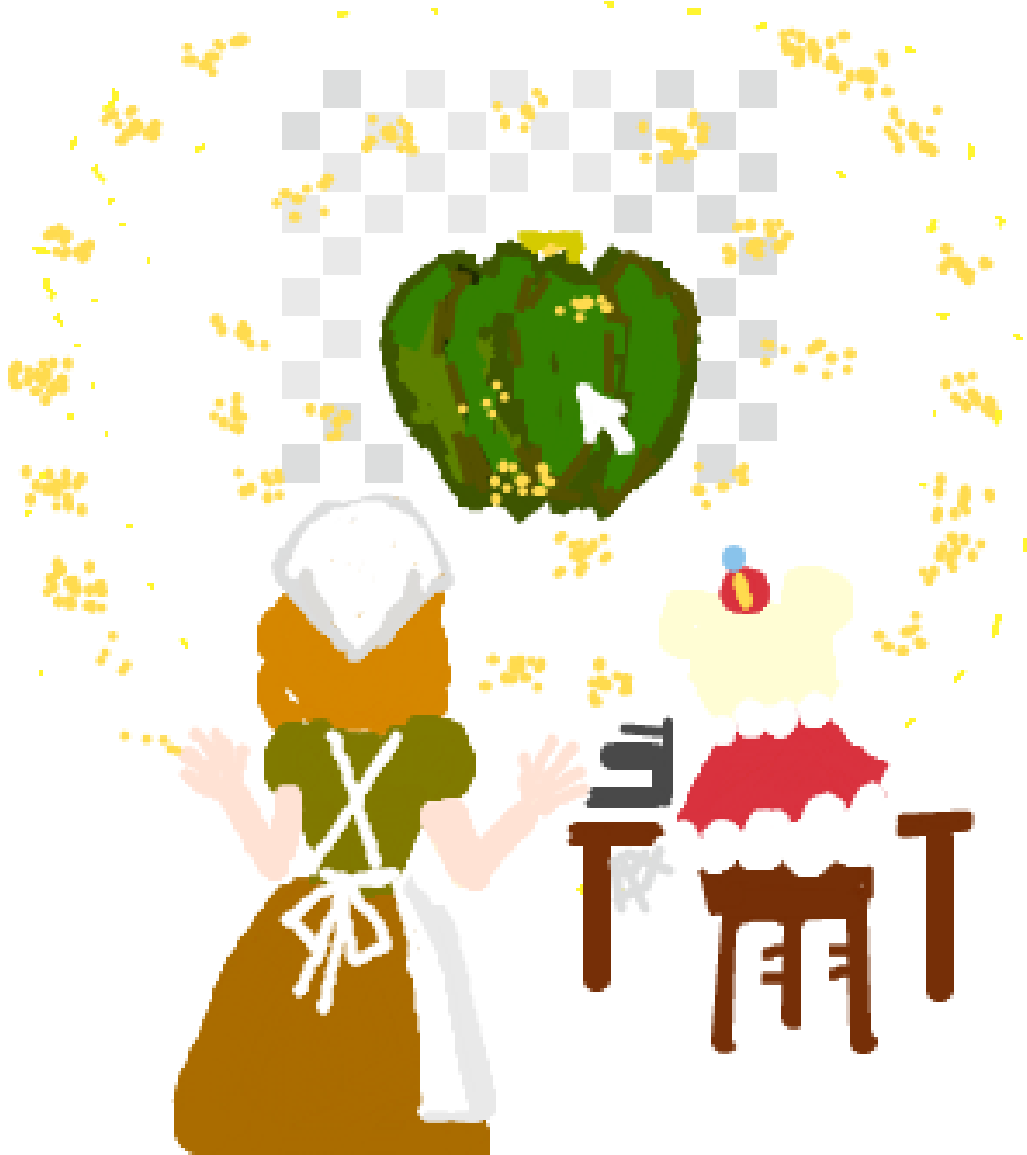
「よく、みておいでよ。」

クマさんは、背景をくりぬいて、カボチャだけを残しました。

そして、ダブルクリックすると、ふしぎなことに、かぼちゃが馬車に変わったのです。

「まあ、すてき！ クマさんは魔法使いなのね。」

シンデレラは意外とかわいいことを言いました。



ねずみ

「さあ、今度は馬車をひく馬だね。」

クマさんは、mixi のコミュニティを覗きました。

「おやおや、著作権的にヤバそうなネズミが六ぴきもかかっているね。一ぴきずつ出しておくれ！」

シンデレラがいわれたとおりにすると、変熊は、(削除されました)の画像をクリックしていきました。

すると、ネズミは、毛のつやつやした美しい六頭の馬になったのです。

しんかんせーん

「そうね、御者（馬車を走らせる人）もいるね」

「乗り物が好きそうなハイカーから選ぶのはどうかしら？」

シンデレラは、しんかんせーんを描いた人たちから適当に選びました。

「シンデレラ姫、どうぞ馬車にお乗りください。」

シンデレラは、御者が意外といい男なのでうっとりしました。

やくそく

お供は4人分のサブアカウントにすることにし、デフォルトアイコンたちは馬車の後ろに乗っていきました。

なんだかんだでパソコンから馬車が出てくるシーンは割愛しました。

「これって手抜きじゃ・・・。」

「さあ今度はおまえの番だよ！」

クマさんは、disを無視しつつ、魔法のついでにシンデレラに触れました。

すると どうでしょう！

汚れた服が、ピンクの美しい服に変わったのです。

今まで見た事もないような不思議な布（ポリエステル）で出来ていました。

歩くとスカートがふわりふわりとゆれました。

「これが私！？ まほうつかいのクマさん、ありがとう！」

シンデレラは自分を写メ撮りしながら言いました。

「これで、バッチリだね。早くお行き。

でも、一つだけ守って欲しいことがあるんだ。」

「何？ 変熊。」

やっぱり毒舌なのは変わらないままでした。

「・・・十二時の携帯のアラームが鳴り終わる前に帰ること。鳴り終わったら魔法がとけて、元通りになってしまうからね。」

シンデレラは、約束しました。

そして、馬車に乗ってオフ会に向かいました。

イマココ

シンデレラは、お城でイマココしました。

王子様は、かわいい王女様が出てきたと聞いて迎えに出てきました。下心が見え三重です。

皆はシンデレラがあまりにもかわいいので見とれてしまいます。

「なんてきれいなんでしょう。」

「ダンスをごらんください、なんておじょうずなんでしょう。」

「あの素敵なコスプレ衣装はどこで作ったのでしょうか？ 自作？」

「あんなにいろとりどりのカースターの宝石が！ ああ、あれが私のだったら！」

キーワードはシンデレラの話題でもちきり！

シンデレラは、変熊との約束どおり、十二時前にうちへ帰りました。

おかえり

しばらくすると、お姉さんたちも帰って来ました。

「おかえりなさいお姉様。お風呂の栓抜いておいたよ。」

シンデレラはいつものように仕事をしたように言いました。

「とても綺麗なお姫様がいらっしゃったのよ。」

「アタシたちに、とても親切にしてくれてね、いっぱいグリーンスターをくださったのよ。」

姫様がシンデレラとは知らないお姉さんたちは、嬉しそうに言いました。

シンデレラはおかしくて、芝生を生やしそうになりましたwwwww。

サテン

次の日もお姉さんたちはお城へ出かけて行きました。ブルジョアめ。

「さあ、今夜も楽しんでおいで、シンデレラ。」

変熊は昨夜よりももっと美しい服（サテン）に変えてくれました。

「これは限定もので、お前以外は穿けない靴なのさ。」

こうやって変熊は素敵なガラスの靴をシンデレラにはかせてくれました。

ペプシ

シンデレラがお城につくと、王子様がかけてきました。

「あなたがおいでになるのをお待ちしております」

王子様はボジョレーヌーヴォー（ペプシ）を片手に、つきっきりでした。

リンリンリン！ リンリンリン！

「あっ！ いけない！」

12時のアラームが鳴り響きました。

シンデレラはあまりにも楽しいオフなので、変熊との約束を忘れてしまっていたのです。

「王子様！ 今日はこれで！」

シンデレラはあわててかけだします。

かいだん

「まってください！」

おうじさまはおいかけました。

シンデレラはお城の階段を、数段飛ばしで、駆け降りました。ヒールなのに意外と器用です。

けれども、あんまり急いで降りたので、ガラスの靴は、つるんと脱げてしまいました。拾っている時間はありません。

シンデレラはそのまま、大きな門をくぐり抜けました。

とくにボケが思いつかないので、二人目のお姉さんはその頃、何も無いところで派手にすっころんでいました。

もんぼん

王子さまは、門番に聞きました。

「いまここを、美しい姫が通られたらろう」

「いいえ、田舎娘が、走りながらイマココしていただけます。」

シンデレラは案外、余裕でした。

王子様はがっかりしました。

もう一人の門番にも聞きました。

「いまここを、美しい姫が通られたらろう」

「きょうはおしろですてきなぶとうかいがひらかれるのさ！ ああ、ぼくもおひめさまとおちかづきになりたいな。」

NPCでした。

おとした

「おかえり姉さん。デラベっぴんなお姫様は今日もおみえになりましたか？」

シンデレラはオヤジギャグを飛ばしながら聞きました。

「それがね、いらっしゃったのだけれども、12時になったらきれいなチャンネーはドロンしてしまったの。」

お前ら実は仲良いだろ。

「あんまり急いで帰ったから何か落としていったみたいよ」

二人目の姉さんはわりと普通でした。

「まあ、何かしら」

姉さんたちはガラスの靴を落としていったこと、

そして王子様が拾って、靴ばかりぼんやり眺めてはためいきばかりついていたことを話しました。

「靴フェチかしら？」

「違うわよ姉さん、きっとお姫様は王子様のハートも落としていったのよ。」

二番目の姉さんは上手いこと言うたびにドヤ顔するのが無ければいいのにな、とシンデレラは思いました。

おふれ

さてさてさて。

数日経ったある日、お城からあるおふれが出たようです。

「あら？ これお城でみんなで靴だけ撮った集合写真じゃない？」

「なにになに・・・『ガラスのくつに、ぴったりあうひととけっこんする』・・・？」

ぽー。

シンデレラは結婚と聞いて目がハートでした。あれでわりと両思いだったようです。

「何でひらがなののかしら？」

「まさか漢字が読めない年の子だとしても結婚する気かしら？ いやねえペドって」

お姉さんたちの会話も、シンデレラの耳には入っていません。

「うふ、うふふふふ。クッコン・・・クッコン・・・オジサマ・・・。」

「シンデレラ、変なキノコでも食べたのかしら？」

キノコっておいしいですよ。

「あら続きがある。国中探して回るそうよ」

「クツはクツでしょ？ 誰かの足には絶対はいるはずよ。そしたら玉の輿よ！」

姉さんに靴フェチ、ペド、お金だけと言われる王子様 (t・ω・) カイツ

ずでーん

靴を持った家来は、シンデレラの家にもやってきました。

「あら、思ったよりも大きいじゃない。」

「本当は怖いなんたらみたいな（削除されました）な展開はしなくてもいいのね。」

姉さんたちがメタ発言しましたが、そのとおり。靴のサイズは小さくもなく、むしろ少し大きいぐらいでした。

「ぴったりはけそうに見えるけれど・・・あら？ あらあら？ あらあらあら？」

魔法の靴というのはうそではないらしく、一見いかにもぴったり入りそうな足の娘でも、つる、つると脱げてしまいます。

「姉さんは運動神経がなってないのよ・・・」

ほら・・・こうして・・・

ぐっと押さえてから・・・

ゆっくり離して・・・

ど、どうよ・・・ほらぴったり・・・」

ずでーん

二人目の姉さんは脱げないようにバランスをとってがんばってこらえてましたが、大きなしりもちをつきました。

「ナイスリアクション！ 姉さん！」

そう言われて、二人目の姉さんはここでもドヤ顔でした。

けらけら

「こうなったら、あの靴のにせものをつくって・・・」

「だめよ、あんな綺麗なガラス、初めて見るわ。」

姉さんたちがひそひそ話をする中、王子様がシンデレラに言いました。

「今度はあなたの番ですよ」

それを聞いて姉さんたちはけらけらけらと笑い出しました。

「その娘は召使いですわ」

「ってかw舞踏会行ってねーしwww」

「あまりにもみずぼらしいので、招かれませんでしたの」

「うはwワロスwww」

二人目の姉さんはひと昔、ふた昔前の某掲示板にかぶれていました。

ぺろぺろ

「まあでも、余興にでもなるだろうからはいてごらんなさいよ」

シンデレラは灰だらけの足をきれいにふいて、ガラスの靴に足を入れました。

すると、どうでしょう。

シンデレラのかわいい、ペロペロたくなr・・・失敬、靴が、ぴったり入りました。

「ははは・・・どうせすぐに脱げてしまうでしょう・・・。」

姉さんがそう言いかけたら、ポケットからもう片方の靴を取り出しはいてみせました。

「おお、あなたが姫さまでしたか！」

「なんと、あの靴が入る娘がいたとは！」

「シンデレラ！ あなたが姫様だったの！？」

「どうやってそのポケットに靴が入ってたの！？」

二人目の姉さんだけ驚くポイントが違いましたが、ごもつともだと思います。

「ロールちゃんうめえ」

継母は出番がないのでやけ食いしていました。

生地

それを陰ながら見ていた変熊、魔法のついでシンデレラを、ちょん。
そうです。みるみるうちに美しい姿（ちゃんとした生地）に変わりました。
王子様はそれはそれは嬉しそうな顔をしていました。
家来たちもこの美しい姫ならと一緒に喜んでいきます。
一人目の姉さんはぼかんとした顔で見つめています。
二人目の姉さんはあのポケットも四次元なのかな？ とまだ考えていました。
継母はロールちゃんを一本食べて満足そうです。
安くておなかいっぱいロールちゃん。みんなで食べようロールちゃん。

けっこんしき

それからのお城は、王子様とシンデレラの結婚式の準備でおおいそがし。

一人目の姉さんはお城に呼ばれて、シンデレラと仲直り。いじわるしていたけど本当は仲が良いようです。

二人目の姉さんはポケットの謎を考えているうちに、手品が上手くなり、楽しそうに仕事をしているようです。

継母はロールちゃんを食べてから不思議と心優しくなり、つつましく老後を過ごしたようです。

お父さんもいたような気がしますが、ごくふつうのハイカーとして継母とごくふつうに幸せになりました。

国中の人々も、二人にお祝いを言いました。

めでたしめでたし

そういえば、シンデレラと呼ばれた少女は、実はかわいいかわいい男の娘だったようですが、そんなことは愛し合う二人には些細な事だったようです。

二人はいつまでもいつまでも、本当に、頑張っで最後まで幸せになりましたとさ。めでたしめでたし。

シンデレラでひとこと

著 やんまに
イラスト くたびれはてこ

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
